弱虫モンブラン

紅月 むぅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弱虫モンブラン

【Ｎコード】
Ｎ７５８６Ｎ

【作者名】
紅月　むぅ

【あらすじ】

忘れられない味。
あなたにはありますか？

（前書き）

ある歌を小説にしてみようと思ったのですが、だめですねw
自由にぐちゃぐちゃやっちゃいました。

むぅの主人公は、みんな失恋するみたいです↑

「いらっしゃいませ。」

駅前の小さな小さなケーキ屋さん。

「モンブラン一つください。」

ここのモンブランを食べるたび思い出す。

貴方のこと。

「下田さん、今日放課後暇？」

千葉くん！　嬉しいのとびっくりで胸がいっぱいだった。

「あっうっうん。暇…だよ？」

「よかった！　よかったらさ…よかったらでいいんだけどさ、一緒にケーキかなんか食べに行かない？」

千葉くんとケーキ！？　大好きな千葉くんと大好きなケーキ…最高の組み合わせです！！

「…あっやっぱ、クレープとかのほうがいい？」

「ケーキがいいです！！！」

今思えば、全てが思い通りにいく日なんてないんだよね。
もし仮にあったとしても違う日に全て不幸が舞い降りる…。

それから毎週金曜日は二人のケーキの日になった。

どちらからそう言い出したのではなく、付き合ってるわけでもなく…
きっとケーキの魔法。

7回目ぐらいのケーキの日。

駅前を歩いてると、小さなケーキ屋さんがあった。
小さいけれどとてもかわいいケーキ屋さんがあった。

「ここにしよ？」
どうしてもここのケーキが食べてみたくなった。
「え？」
「今日はここで食べない？」
君は優しくうなずいて言った。
「いいよ。」

あたしは苺のショートケーキ。貴方はモンブラン。
欲張りなあたしは言った。
「ちょっと食べていい？」
「俺の話聞いてからだったらね。」
「その話長くない？」
「短い短い。」
「なら聞く！」

「俺…俺……下田さんのことが…
好きです。」
信じられない。

きっと夢だ。
ほっぺをつねる。
…痛い。
夢じゃない。
どうしよう。
なんであたしなんか…

「ごめん。こんなこといきなり言われても困るよね？」

「こっこまんない！　いや困ったけど…。だけど…嬉しい。嬉しいよ。」

今きっとあたしの鼓動が世界で１番速い。

「よかったぁ。」

いつもの…違う。
いつもよりもっともっと優しい顔で君が笑う。

「じゃあ、ケーキ食べよっか？」

「うん！」

この日食べた貴方のモンブランは甘かった。
甘すぎて、一口だけですぐにお腹いっぱいになってしまうような…
貴方の魔法がかかってました。

大きな幸せしか見えてなかったのかもしれない。
大きな幸せしか見てなくて、小さな幸せを忘れてたのかもしれない。

貴方はいつのまにか笑わなくなってたね。

なのにあの頃のあたしは、気づいてなくて…

昔は貴方と目が会っただけで幸せだった。
貴方が笑ってるだけで幸せだった。

なのに、今は貴方といられることが当たり前のように感じて…
貴方とケーキを食べるだけじゃ物足りなくて…

貴方の優しい笑顔も忘れて…

こんなあたしを貴方はなんて思っただろう。

きっと罰があたったの。

あたしがいけないのに

別れよう　って言った貴方に泣きついた。
「あたしを見捨てないで。」
って。
優しい貴方は断らなかった。
きっと、断れなかった。
あたしは優しい貴方につけ込んだ。

付き合ってから1年と半年ぐらい。
つけ込んでから半年ぐらい。
あたしたちは、あのケーキ屋にいた。
あたしはチーズケーキ。貴方はモンブラン。

いつも通りあたしは言う。
「ちょっとちょうだい？」
貴方は真顔でいう。
「俺の話聞いてからにして？」
「いいけど？　速くしてね。」

「…別れよう。」

「え？」
頭が真っ白になった。1回言われたはずなのに、どうしていいかわからなくなる。

「…ケーキ食べよう。」

「…うん。」

この日食べたモンブランは、まずかった。
作った人が砂糖の変わりに塩を入れてしまったような…
飲み込むのにも苦労する味だった。

ケーキを食べ終えて、いつも行く夜景の綺麗な丘には行かず貴方は帰った。

貴方が角を曲がり見えなくなったとたん、涙が溢れてきた。

次から次へとめどなく溢れ、1年半の涙が一辺に溢れたかのような…。

あたしは思い出していた。貴方に告白された日に食べたモンブランを。

そして、今日食べたモンブランを。

その味はあまりにも違いすぎで…。

あたしがばかだった。
今更、気付いても遅いのはわかってる。
でも後悔せずにはいられなかった。

あの日は…

1年たった今モンブランを食べると蘇る。
2つのモンブランの味。
いい思い出。今となってはそう思う。

「いらっしゃいませ。」

あたしはあの人と別れて、2つ変わったところがある。

「モンブラン1つ。」

1つ目は、モンブランを頼むようになったこと。
あの人と付き合ってた頃は頼まなかった。だっていつもあの人がくれたから。

2つ目は…

「ここ、座ってもいいかな？」

「…いいけど。」

「下田さんがモンブランなんて珍しいね。」

「全然珍しくない。」

「そっか。」

「うん。」

「ちょっとちょうだい？」

「千葉くんだってモンブランじゃん。」

「…俺が話したら食べていいよね？」

「…勝手にすれば？」

「俺…やっぱ下田さんのことが忘れられない。でも、自分からふっといてまた付き合おうなんて自分勝手すぎるから…だから、今日にかけたんだ。もし今日、下田さんがここでモンブランを食べてたら…。自分勝手ってことは十分わかってるつもりだけど…

下田さん、俺とつき合ってくれませんか？」

「…。」

「…やっぱ無理…だよね。」

「…自分勝手でよかった。」

「え？」

「千葉くんが自分勝手でよかった。」

「…。」

「ケーキ食べよっか？」

2つ目はね、

千葉くんのことが頭から離れなくなったの。

会いたくて会いたくて、死んじゃうかと思った。

けどね、このことは千葉くんには秘密。

あたしを1人にした罰なんだから。

（後書き）

読んでくださりありがとうございました（´∀｀）・＋。

きっと、あなたは今日にでもこの小説を忘れるでしょう↑

モンブランを食べたときにでも思い出してやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7586n/

弱虫モンブラン

2010年10月10日15時55分発行